

月刊

moritomi

森と未来

01

2022.07

山梨日日新聞社と「やまなしSDGsプロジェクト」が取り組む、
持続的に森林の価値を守り、森と暮らす未来を
切り開いていくためのアクション「moritomirai(森と未来)」。
取り組みの一つとして、今月から1年間、
毎月下旬に「月刊moritomirai」を掲載します。

毎回「森」に関するテーマを取材し、
山梨の森林の今を伝え、未来を展望します。
森を知る冊子として毎月保存してもらいたいとの思いから、
本のようにページをめくることができて、
保存がしやすい
四つ折りにして読む特別な紙面にしました。

初回のテーマは
「森林資源の循環利用」。

木を切ることが
森を守ることに繋がる理由を
聞きました。

傾斜した山肌に高さ20メートルほどのアカマツやヒノキが立ち並ぶ富士川町内の県有林。「ズドン」。大きな音が林間にこだまし、かすかに地面が震えた。行われていたのは、木材としての利用の適齢期を迎えた木々を収穫する主伐（皆伐）と呼ばれる作業。伐採跡地には丸太と切り株がずらりと並んでいた。森を守ることに逆行しているようにも見える光景だが、主伐は森林資源を持続的に確保するために欠かせない。山梨県県有林課の早川高志課長補佐は「適切な計画、管理に基づいて木を切って活用し、跡地に苗木を植え、育

切つてつなぐ 森林の恵み

て、また切って使うというサイクルを繰り返すことで、将来にわたって木材を安定して利用できる環境が整う」と話す。

山梨県は県土面積のうち78%を森林が占め、そのうち44%が人工林。人工林の7割以上が収穫期の樹齢50年を超えている一方、若い木が少ない森林の、少子高齢化状態が問題となっている。

樹木は高齢になると二酸化炭素(CO₂)吸収量が落ち込むとされ、森を若返らせることは地球温暖化の抑止につながる。また、高齢になったス

ギやヒノキを、花粉飛散量の少ない新品種に植え替えることで、花粉症の抑制に寄与できる可能性もある。

そして何より重要なのが、偏った齢級構成(木の年齢の分布)が主伐により平準化することで、森林資源の長期的な安定供給が可能になることだ。

山梨の人工林の大部分は戦後の1950〜60年をピークに造成された。空襲で焼失した家屋の建て直しなどで木材需要が高まり、急ピッチで天然林の伐採と材木にしやすい針葉樹の植林

が進んだ。

しかし、60年代後半以降は安価な外国産材の台頭などで需要が低迷。山村の過疎化や高齢化などが重なり、大量伐採と大量植林の後に林業が急激に衰退した結果、齢級構成の偏りが著しい森林になってしまったという。

人工林は、真つすぐ均一な太さで質の高い木を育てることなどを目的に、針葉樹を高密度で植えるのが基本。そのため間伐など人の手を入れて育てなければ、十分な光が入らず森が荒れ、土砂崩れなどを引き起こしかねない。

「循環利用」官民が注力



主伐作業で木を切り倒す作業員。切ることで植えるためのスペースが生まれ、森林資源の循環利用が進む

高齢化した人工林でも適正に管理すれば水を蓄えたり、土砂災害を防いだりといった公益的役割は機能する。ただ、切らなければ人は木材という森の恵みを受け取ることができない。木材の活用先は住宅をはじめ、食器や紙、バイオマス発電の燃

伐採された樹木は、枝払いや玉切りなどの作業を経て丸太に加工。再生可能な資源、エネルギー源として活用される



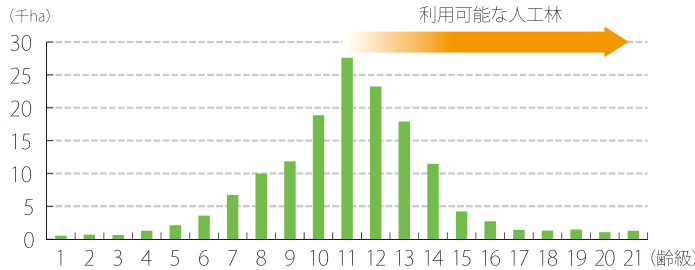
料など多岐にわたり、人々の生活に欠かせない。燃やさずに建材などとして使えば、CO₂が長期にわたり木材内に固定されるため地球温暖化対策にもなる。

積極的に森林資源である木材が活用されることで森から収益が生まれ、その一部は植林など健全な森林づくりに還元される。森林資源の安定供給と、安定収益が見込めるようになれば、公益的機能を発揮させるためだけでなく、林業や木材に関する産業が活性化し、収益を得るために森に携わる人材が増えることにもつながって



主伐作業が行われた伐採跡地。切り株がずらりと並ぶ。今後、苗木が植えられ、若い森に生まれ変わる

人工林の年齢（齢級）



※齢級の単位は5年（林齢1～5年生が1齢級）
出典：山梨県森林整備課「森林簿」平成30年度末現在

いく。
一方で、課題もある。人件費の上昇や獣害対策などで森を管理する費用が高まっているのに対し、木材価格は長期的に低迷。収益とコストがつり合っていない状態が続いている。

山梨県は課題解決のため、伐採や運搬、植林などを一体的に行う「一貫作業システム」による低コスト化、県有林では環境に配慮した森林管理のお墨付きとなる国際的な認証制度「FSC認証」取得による高付加価値化などを推進している。
また、パンフレットやイベント、小学生向けの冊子などで「切って使うことが森のためになる」ことの周知にも力を入れている。

「林業の現場で働く中で、森が荒れていることを実感している。一刻も早い対策が必要だ」と話す京島開発の京島良忠社長

「シヨック」や、ロシアによるウクライナ侵攻に伴うロシア材輸入禁止などにより世界的に木材供給量が不足。県内でも木材価格がにわかに上昇



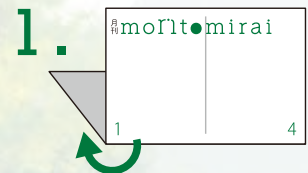
伐採跡に植えられたヒノキの苗木。周囲は獣害対策のネットで囲まれている。下草刈りや間伐など地道な育林作業を積み重ねて、未来に森の恵みを届ける
＝いずれも富士川町内の県有林

していることも踏まえ、高齢樹木の伐採を進め、齢級構成の平準化を図っていくことが求められる。
「脱炭素」「SDGs（持続可能な開発目標）」など世界的に環境へ配慮する動きが加速し、再生可能な素材、エネルギーの源として重要度を増す森林。大量の切り株が残された富士川町内の県有林は今後、苗木が植えられて若い森に生まれ変わる。

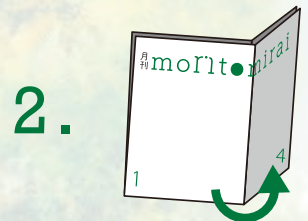
「林業は、大昔に植えられて長い年月をかけて育った森の恵みを受け取る仕事。そこにやりがいと感慨深さがある」。現場で主伐作業に取り組んでいた京島開発（富士川町、京島良忠社長）の関貴仁さん（30）は、林業の魅力をそう表現する。
「切って植えて育てて、自分たちも森の恵みを未来につなげていきたい」。視線は、はるか先に向けられている。

moritmirai

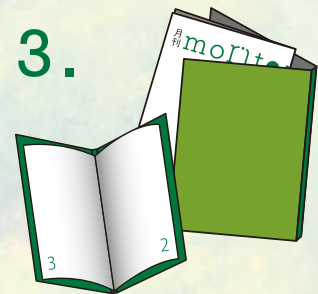
この紙面の読み方



この面を表のまま
二つ折りにします。



さらに上半分の面が
表になるように四つ折りにします。



四つ折りにすることで
冊子状の読み物になります。
ファイルなどに挟んで
保存してください。



企画制作
山梨日日新聞社広告局

月刊moritmirai

次号は8月27日(土)予定

moritmirai.com

本紙面は山梨の森林サイト
「moritmirai」でも
ご覧いただけます→

